

中国（中華人民共和国）

多様性

中国はロシア、カナダに次いで3番目の大国である。14の国々と国境を接し、インドなど国境の一部は未確定である。面積はアジアの約35%を占め、東西5,000 km、南北5,500 kmで、熱帯から冷帯、モンスーン気候から乾燥気候までほとんどの気候区が見られる。

人口はインドと並び世界最大級で14億を越える。人口の90%以上は漢民族で、他に満民族、ウイグル族やモンゴル族など55の少数民族からなる典型的な多民族国家である。人口分布を見ると、ハイホー（黒河）～トンチョン（騰冲）を結ぶ線で国土が2分されるが、東部の盆地、丘陵、平野に人口の96%、西側は沙漠や山岳地帯ではヤクやヒツジなどの移牧、ウマやヒツジの遊牧やオアシス農業が営まれており、人口はわずかに4%と、極端な隔たりが見られる。



華北平原は小麦などの畑作中心、華中の年間降水量1,000 mm、チンリン山脈～ホワイ川以南では水稻中心で、二期作も行われている。北東部では麦やコウリャンが収穫されるなど、適地適作が行われており、農業の地域区分が成立している。

1949年、中華人民共和国成立後、少数民族の居住地区に漢民族を送り込み、漢民族の文化への同化政策をとっているが、チベットや内モンゴル自治区では、少数民族との政治問題が絶えない。

【資料】 中国の時間

北京時間（東経120度）を全土で使用している。中国は東西方向に5,000 kmと広く、東端が黒龍江省で東経135度、西端は新疆ウイグル自治区で東経75度。従って60度、4時間の時差があるが、全土で同じ標準時が使用されている。そのため、太陽が南中する時刻は中国の東端では午前11時頃、西端では午後3時頃となる。

人口問題

1949年の人口は約5億であったが、1978年には9億5514万人と爆発的に増加した。その裏には、「子孫満堂」（子供や孫がたくさんいることが幸せの証である）、「人口は限りない創造力の源泉である」といった子沢山を奨励など社会風潮があった。ところが、中国の食糧生産からすると、養い得る人口は16億とはじきだされ、21世紀半ばには達してしまう勢いであったため一転して人口抑制政策に転じた。

1978年に「晩（晩婚）、少（少ない子供の数）、稀（長い出産間隔）」をキーワードとした計画生育政策が打ち出され、「一人っ子政策」の実施を決めた。これによりある程度の人口抑制に成功したが、いくつかの歪みが出てきて新たな社会問題となっている。

① 黒孩子の問題

子どもは1人ということで、密かに生まれた子供は戸籍がないまま成長した。その数は1,300万人（2010年中国政府の統計）にのぼると推定されている。国民として認められていないので学校教育や医療など行政サービスを受けることができない深刻な状況にある。

② 男女比の問題

男子が親の面倒を見るのが、漢民族の伝統である。農村では肉体労働を積極的に手伝ってくれる男児の出産を望む。そのため、出生前の性別検査で胎児が女子の場合は中絶を行う

ケースが多発した。男女出生比率は通常「男 105 対女 100」前後だが、男 117.7 (2012 年) と報告されている。中国の男女人口数を見ると、男性が常に 3,000~4,000 万人多い。男女出生比率の偏りが、結婚難や出産適齢期の女性不足をもたらし、将来人口構造が大きく崩れることが予測されている。

③ 甘やかされ世代の問題

1 人っ子は両親と祖父母から一身に愛情を受け、甘やかされて育ち、小皇帝 (女兒は小公主) の言葉が生まれた。その結果、前の世代とは異なる価値観を持ち、精神的、肉体的に弱い大人が目立つようになった。

④ 労働力不足の問題

人口抑制を進めた結果、中国の総人口に占める 65 歳以上の人口の割合 (高齢化率) は 1982 年の 4.91% から 2012 年の 9.39% にまで上昇した。2025 年前後に高齢社会の基準値である 14% に達すると推測されている。労働力不足など中国経済へ深刻な影響も考えられている。

2015 年中国政府は 1979 年から実施してきた「一人っ子政策」を廃止した。すべての夫婦に第 2 子の出産が認められるようになったが、3 人目以降は依然として禁止されたままである。

鉱物資源と領土拡大

広大な国土を持つ中国は、地下資源が豊富である。鉄鉱石、石炭に加え、エレクトロニクス、航空宇宙、原子力などの先端科学技術に不可欠のレアメタル、希少金属を多産する。これらは耐熱性に優れたり、強力な磁力があったりと様々な特徴をもつクロム、バリウム、マンガンやパナジウムなどである。

世界で最大級の人口を抱え、世界人口の 1/5 弱に相当する人々が急に消費に目覚めれば、どうしてもあらゆるものが不足するのは目に見えている。そのため今日の中国は資源の確保に躍起になっている。その例が、尖閣諸島付近に石油が埋蔵されている可能性がでてくると、これまでの歴史との整合性など一切関係なく、横車を押して領有を主張する。豊富な天然資源が眠るとされる南シナ海でも、独自の「9 段線」を根拠にほぼ全域での管轄権を主張し、南沙 (スプラトリー) 諸島ミスチーフ礁をめぐる国連海洋法裁判所の仲裁を紙屑と呼んで無視している。チベットやウイグル民族などの複雑な民族問題にも資源確保の意図が見え隠れしている。中国の領土拡大の最終目的、行き着く先は何処なの不安がつきまとう。

社会の変化と大気汚染

農業は政府が農産物の種類、生産量、作付面積を決め、集団で農業を営む人民公社制で行なわれてきた。1970 年代後半に入ると、農業生産量は増えず、農民の生産意欲は低下し、急増する人口に食糧生産が対応できなくなった。その打開策として 1980 年代から「生産責任制」を導入し、一定量の農産物を国に納めれば、それ以外は農家のものになった。その結果、生産量は飛躍的に増加した。

近年、生活水準の向上に伴い肉や魚の消費量が増えるなど食生活に変化が見られる。世界の豚肉消費量の半分、魚の 1/3 を中国が消費しているが、このまま増え続ければ世界の食料事情への影響は避けられそうにない。

工業は建国以来、旧ソ連を手本にしてきたので重工業優先の工業化を進めてきた。その結果、軽工業、消費財工業の発展が遅れ、加えて生産効率の悪さなどで国際競争力は弱かった。工業における改革、開放は沿岸地域に経済特別区 (経済特区、"Special Economic Zone" (SEZ)) や経済開発区を設置することから始まった。経済特別区は外国資本、外国技術などを誘致し、獲得のための拠点

である。国内とは明確に分離され、安い税金、輸出入関税の免除などの優遇措置が与えられている。現在、深圳（シエンチェン）、海南（ハイナン）島、廈門（アモイ）、汕頭（スワトウ）、珠海（チューハイ）の5地区が指定されている。

一方、経済開発区は1984年、対外国開放政策として、青島（チンタオ）、天津（テンチン）、上海（シャンハイ）、広州（コワンチョウ）、北海（ペイハイ）など14の沿岸港湾都市が指定され、外国資本や技術の国内への波及を目的としている。

中国のエネルギーの中心は石炭で、生産量は世界の半分以上を占め世界1である。しかし、石炭をエネルギー源とする多くの工場や発電所に公害防止装置が普及していないこともあって二酸化イオウが大量に排出され、酸性雨（中国では「空中死神」）の原因となっている。これが偏西風に乗り、日本に運ばれ日本の酸性雨原因の一つにもなっている。



大気汚染で霞む天安門広場

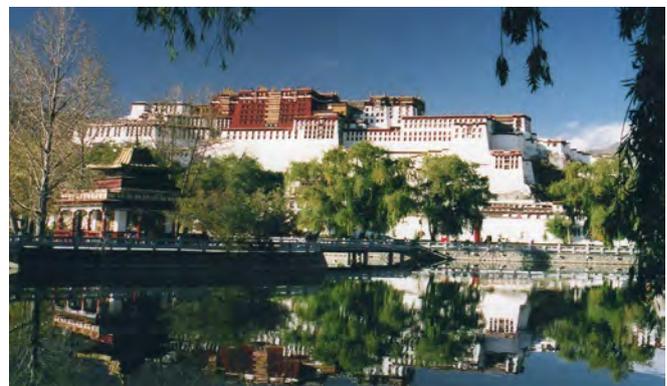
中国の大気汚染は1990年代初頭から2012年から2013年にかけて、各都市の大気汚染が顕著になった。特に問題になっているのが直径2.5マイクロ（100万分の1）メートル以下の微粒子状物質PM2.5といわれる有毒物質である。微粒子なので肺の奥や血管にまで入り込み気管支炎や肺ガンの原因となっている。中国では悪性腫瘍（ガン）による死因のトップが肺ガンである。この厄介なものが偏西風によって日本に押し寄せている。

はっきりした原因は解らないが、近年、東北の春山での山スキーをしていると滑走面に油脂のような黒いものがべっとりと着くことが多くなった。

<チベット弾圧>

第二次世界大戦後、インドの独立にともないイギリスのインド撤退を見計らって中国人民解放軍をチベットに送り込、1950年に制圧、無理やり併合してしまった。

中国共産党にとってチベットは、最も時代錯誤な信仰と慣習が残る野蛮な地であり、「四旧」（Four Olds—旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣）を打破し、解放しなければならない対象で、伝統的な価値を有するチベットの宗教と文化をことごとく破壊した。この中国の横暴に対して



チベットのシンボル ポタラ宮殿の背面

チベット民衆の抵抗活動は高まり、1959年、首都ラサで民衆が大規模な反対行動を起こした。ダライラマ14世は、流血の拡大を避けるためインドへ亡命し、インド北部のダラムサラにチベット亡命政府を設立し、現在に至っている。

ダライラマ亡命後も中国軍の徹底的な流血の弾圧が続き、亡命政府の推計によると、600万人のチベット人のうち120万人が命を奪われた。中国はチベット独自の文化も破壊し、過酷な人権弾圧は現在も続いている。

例：僧侶は常に監視下に置かれ、思想的な締付が厳しく、仏教の学習や修行が真面に行えないという。ダライラマを支持したり、肖像を拝むことさえ禁止されているという。チベットの独立や宗教活動の自由を求めてデモを行えば、すぐに公安が飛んできて投獄されるという。現在、1,000人近い人々が囚人として捕えられており、僧侶は出所後も寺院に戻ることは許されないという。

<ダライラマ 14 世 亡命ルート>

インド、アルナチャルプラデッシュ州を旅した時、ダライ ラマ 14 世の亡命ルートをとった。彼がインド亡命を決意したのは 24 歳の時だった。わずかなお供を連れて夏の宮殿ノル布林カの裏口から出たとされている。



ダライ ラマ 14 世 亡命ルート

り、ヤクに跨ってタワンにたどり着いたことが知られている。

コースを調べてみると、ラサ→ケエション→(ヤルツァンポ川)→チョンゲイ→ルンツェゾン→(国境のヒマラヤ山脈)→ジミタン→タワン→デズポール(ブラマプトラ川)となる。ここからは列車で移動した。

10 年ほど前、チベットで 6,000m のフスコダ山のスキー登山でヒマラヤに入った。登山行動中に村長と公安がベースキャンプに来て、どんな人たちで、何の目的かなどなどを聞きに来たという。そして、隊員の平均年齢 70 歳を知り、疑いの目が心配の目が変わったと聞いた。考えてみれば、ダライ ラマが亡命したルート山域でのスキー登山だった。

中国のインド侵攻時、同時にブータンにも侵攻し、国土の 20% を奪い取った。中国軍は国境を無視し、勝手に道路をつくり、中国の領土の標識を建てたという。その後、話し合いがもたれたが解決に至らず、未だに国交がない。そして、ブータンはインド軍の駐留を認めて中国を牽制している状態である。

<万里の長城 1> 金山嶺・司馬台長城

3 月中旬の北京の空は早朝から霞んでいた。ガイドは霧だというが、苦しい言い訳に聞こえた。7 時、既に市街地の道路は車で埋っていた。1985 年には、自家用車が 1 台もなかった北京だが、2003 年には 80 余万台となり、この年に自動車総数がロンドンを越える急増ぶりだ。要するに、道路建設が間に合わないのである。

緑の殆どない山を縫って万里の長城は延々と続いていた。山を越え、丘を過ぎ、急斜面にも張り付いて視界から消えるまで続いている。常識を遥かに超えた規模だ。長城に点々と見張り台と狼煙台を兼ねた楼が建っており、あたかも小さな砦であった。階上への石段は狭く急で直角に曲がり暗かった。城壁の高さは、場所によって差があるようだが 5~7m 位だろうか。そして、両側の上部には投石、射撃用口が設けられていた。幅 3~4m の通路に敷き詰められた一部の敷石を除くとチュアンと呼ばれる薄いグレー色のレンガが白っぽい漆喰で固められていた。崩れかけたレンガのところに来ると、俄かガイドが日本語で「明」といいながら指差してくれた。万里の長城といえば秦

の始皇帝が浮かぶが、今踏みしめている長城は明代に造られたものだという。

始皇帝と万里長城との関係を見ると、群雄割拠する国々が外敵から身を守るための城郭、自分の国土を守るための設備まで遡る。外敵の中には北方騎馬民族だけでなく周囲の敵、漢民族も当然含まれていた。ところが、秦が天下を統一し、文字をはじめ度量衡、そして車のはばをも統一して国内交通の便をはかり、交流を促した始皇帝にとって国家内部の城郭、城壁は不用どころか邪魔物となってくる。それで、これまでに造った城壁の不必要なところを取り壊し、必要なところを繋ぎ合せ、補強し、さらには新たに造り足し北方民族侵入に備えたものが紀元前3世紀で、万里長城の実質的はじまりである。ただし、当時の長城は今日見られレンガ、チュアンを積み重ねたものではなく、ただの土壁であったことが発掘調査で明らかにされている。そして、北方騎馬民族匈奴の侵入を食い止めるには、彼等の命ともいえる馬の移動を抑える程度の障害物で事足りたらしい。

ところが、今歩いている、いや登った長城は、難攻不落を思わず立派なものだ。俄かガイドが「明」、「明」と指差していたレンガを長城に使用したのは、明がはじまりだとも聞いた。大きく崩れ長城の一部からも解かったが、何層かのレンガの下は粘土質の黄色い土であった。

秦の始皇帝当時の長城よりも遥かに強固な長城を必要としたことは、外でもない北方騎馬民族の勢力が強かったことによる。明は、東アジア一帯を支配したモンゴル民族の元を打破って成立した国である。元の残党が北の草原に逃げ帰ったとはいってもいつまた攻めてくるか解からない。不安は常につきまわっていたといえる。また、



元が支配した百数十年間は、長城を当然必要としなかったから荒れ果てていたことも容易に想像できる。このような情勢下で明が長城修築に本腰を入れたことも至極当然だった。

明代後期、1600年頃にほぼ現在の形になったとされているが、その規模は渤海湾に望む山海関から河西回廊の嘉峪関までの2,400 kmに及び、人類史上最大規模の土木工事となった。また、北京の北西から黄河南下するあたりまで、長城が二重に築かれているのは遊牧民の侵入が激しかったことを物語るのだろうか。

ところで、秦と明の長城の目的が、漢民族の居住地とその以北の騎馬民族の地を区画するものと同じながらも、その位置となると秦の長城が北に大きく膨らんでおり、重なることはない。秦の長城は黄河流域を完全に取り込み、ゴビに入り込んでいる。大部分は農耕に適しているところではない。遊牧民を北に押しやって勢力拡大の結果とも理解できるが、農耕民族だけでなく遊牧民をもとりこみ遊牧民の生活圏、遊牧地の保護することも長城の目的であったとする説もある。思えば、今日のチベット独立運動を押しさえ込む手段としてラサに漢民族を送り込んだことに似ている。また、最近完成した青海チベット鉄道も同様の目的を持つと思える。いづれにしても長城は、漢民族の勢力圏を明らかにするものであり、歴代王朝が勝手に決めたもので、北方の遊牧民は長城以南への侵入機会を常に狙っていたことも肯ける。

尾根筋にへばり付きながら伸びる長城の両側とも樹木が殆どなく枯れ草と剥き出しの大地だった。農耕地は勿論のこと家畜の姿も人影も人家を望めなかった。今歩いているところは確かに長城、すなわち「城」であるが、日本の天守閣をもち、居住用の建物を合せもつ「城」とはまるで異なる。

中国では防御のために造られた壁も「城」の意味を持ち、内部に兵を住まわせる機能はないようである。

<万里の長城2> 慕田峪長城

慕田峪長城は北京市から北東へ 50 kmにある。文献によると北齊時代に築かれた長城の上に建設したものだという。1987年に「新北京旅遊世界之最」(北京観光の世界一)に選ばれ、1990/11/11、江沢民主席が「慕田峪長城」の題字を自ら揮毫したことで知られ、中国肝いりの長城である。

慕田峪長城の構造は、かなり特別なものだという。見張り台は密集しており、堅固で、両側にはともに急斜面になっている。南東には3つの見張り台と一つの正関台が聳え立っている。北西の長城



は海拔 1,000m の山稜にあって、険しい山の峰の上に建っている。しかも、山の起伏に沿って連続と続くので、巨大な龍が飛び立つように見える。他の長城と違い、地面の 96%が植物に覆われた山々に囲まれており美しい。春には花が爛漫と咲き乱れ、夏には緑満ち溢れて、水流が響きわたる。秋には一面紅葉で覆われ、果実がたわわに実り、冬には雪が降り積もり、一面の銀世界となるという。北国らしい美しさから「万里の長城は、慕田峪長城が最高」との栄誉を得て、2002年には5A級の観光地に認定された。

<胡同 (hu tong)> — 庶民が暮らす街

胡同とは、ペキン特有の歴史ある路地、横丁の意味で使われている。大街(タ-1)と対をなす言葉で、大街すなわちメインストリートは人々の通るところ、胡同は人々の生活するところで、庶民の生活が染みついた空間である。その起源は元、明、清3時代の都の街並みとして故宮を取り囲むように造られた。

故宮の東と西側には貴族、南と北側は庶民と区画されていたという。先ほど歩いた大通りのバス停は「〇×胡同」だった。また、今でも「米市胡同」、「豆腐池胡同」など、住民の職業な施設にちなんだものが見られるという。胡同は通路に背を向け、中庭を囲むように東西南北に4面の建物が並ぶ「四合院」で、1箇所の門を閉めれば外界とは隔離される構造になっているという。

故宮南のホテルから天安門広場にむかう時、塀に囲まれた平屋が続くところがあった。塀には解体後の店構えが美しい大きな写真で示され、奥には解体されたレンガの山と鉄骨を剥き出した建物が見えた。胡同は文化大革命で10年にわたり傷つき破壊され、1978年から始まった改革開放路

線は高層ビルへと変貌し、2008年のペキンオリンピックに向けた開発の波は一層拍車がかかっているのだという。



路地へと入った。表通りの喧騒は途端に消えた。道路中央を1人、2人と通る。犬もよちよちと走り抜けた。さらに、見通しのきかない小路が奥へと伸びているのが眺められる。開いた門から内部を覗いても通路が鍵形に曲がっており中庭は見えない。これも直線を嫌う風水説の表れだろうか。通路に面した家屋は一様に分厚い灰色の壁で、小さな窓が規則正しく並んでいた。

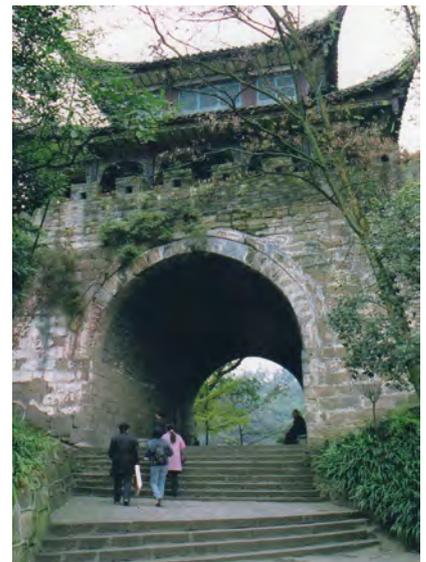
通りの一角に掲示板があった。大きな字のチョーク書きは、生活目標というかモットーらしく「ごみの始末は…」で、掲示物は集会などの連絡のようだ。胡同は王府井大街のような華々しく飾られたところではない。昔と変わらぬ庶民の日常生活の匂いが漂い、迷路に迷い込んだような不思議な感覚を味わいながらそぞろ歩きをしばし楽しんだ。

<少数民族 チャン族の心遣い>

四川省成都（チョウター）の西58km、バスで2時間のところに都江堰がある。2,200年を経た今日でも成都の治水、灌漑、工業用水路の役目を果たす古代の水利、灌漑施設で世界遺産の指定を受けている。

成都から乗ってきたバスの下車地点が都江堰とっていたら、都江堰市からバスを乗り継いだ郊外の岷江だった。観光案内所でバス乗り場を尋ねると、わざわざバス停まで歩いてくれて「ここで待つように」と教えてくれた少数民族チャン族の親切が嬉しかった。

2008年、この地を襲った四川大地震で死者7万人弱、負傷者37.5万人、行方不明者2万人弱の被害が出た。当然文化財も被害を受け、都江堰を建設した父子を祀った二王廟の山門が倒壊、本堂にも被害が出たと報じられた。自然を破壊することなく、自然を利用した灌漑事業の模範も自然災害には抗しがたかった。



中国の大地が生んだ四大料理

中国には「北鹹、東酸、西辣、南淡」という言葉がある。ペキン（北京）やシャントン（山東）の北方料理は塩からく、チャンスー（江蘇）やチョウチャン（浙江）の東方料理は酸っぱく、西方のスーチョワン（四川）料理は辛く、南方のコワントン（広東）料理はあっさりしている。中国を代表する四大料理の特徴を説明する文言である。ただし、「淡」という文字には、「あわい」とか、「あっさりしている」という日本語訳では説明しきれない内容が含まれているという。広東料理は日本の懐石料理のような、肉や油気のない薄味料理ではない。肉も脂肪もたっぷり使っているのだが、調和のとれたまろやかさがある。強烈で刺激的な味付けをせず、材料の持ち味を生かすことにおいて、「淡」と表現される。

シャントン（山東）料理、ペキン（北京）料理

畑作地域であることから麺類、パオツ（包子）、チャオツ（餃子）、マントウ（饅頭）など小麦粉を使った料理が多い。また、寒い地域であることから油、ネギ、ニンニクなどを多く使い、味は味噌や醤油による濃い目の味付けが特徴である。素材はブタ、アヒル、ヒツジが中心で、魚は黄河のコイくらいである。ペキン料理はシャントン料理を基礎にして、宮廷で発達した。代表的のものにペキンダックがある。

<北京で食べたペキンダック>

万里の長城で最も美しく「長城の中の長城」といわれる金山嶺～司馬台、全長 12kmを歩くため北京で投宿した。夜、ペキンダックを食べる機会があった。

パンフレットに生後 50 日前後のアヒル、高蛋白質の練り餌を 1 日 2~4 回強制給餌で肥育、内臓を抜いて空気で膨らませ全身に飴を塗って乾かす、釜に吊るしてナツメやアンズの薪で焼く、滴り落ちる脂に何度も香料と調味料を加えたものを何度も塗る、何とも手の込んだ料理で、さすが宮廷料理の感があった。しかし、説明文に、必ずしも高級料理ではなく仲間同士でちょっと豪華な料理を楽しむ料理だと記されていた。

丸焼きにしたアヒルの皮に甘味噌をつけ、千切りのネギとパオピン（薄餅、薄く焼いた小麦粉の皮）で食べる。焼き皮のパリッとした香ばしさとにじみ出る脂が美味かった。

<餃子の旅路>

北京、山東料理圏では降水量が少なく、米ではなく小麦栽培である。中心は華北平原で、南部に徐州（シュイョウ）がある。“徐州 徐州と人馬は進む……”の軍歌「麦と兵隊」の歌詞に“行けど進めど 麦また麦の 波の深さよ 夜の寒さ”と広大な麦畑が詠われている。ここは世界最大の小麦生産地で、世界の 15%を生産する。当然、主食は小麦である。

餃子をはじめ饅頭（マツリ）、発酵させたものを丸めて餡なしで蒸したものの、麺条（ミンチヤオ）、包子（パオ・肉まん）、餅（ピロ・山形のどんどん焼き）などに調理して食べている。餃子は主食だから日本の「餃子定食」、即ち、餃子をおかずにご飯を食べることは中国人には信じられないことである。

餃子は小麦粉で作った皮で、肉やエビ、野菜などの餡を包み、茹でる、焼く、蒸す、揚げるなどの方法で調理した食べものである。餃子の歴史は古く春秋時代の紀元前 6 世紀頃まで遡り、華北平原の山東省が始まりとされている。主食の餃子は皮が厚く、全体的に淡白な味の茹（水）餃子である。日本では当たり前のニンニクが具に入ることはほとんどなく、皮を作るときスープを用いることもあるという。

日本へは江戸時代前半に入ってきたとされているが、本格的な出会いは、餃子の故郷である山東省の人たちが開拓のため旧満州、現在の東北地区に入植したことに始まる。日本からも多くの農民が開拓のために入植し、宇都宮の旧日本軍 14 師団が駐屯した。その結果、多くの日本人が本場の餃子の味を旧満州で知ることになる。戦後、彼らが日本に引き揚げ、宇都宮を中心に餃子文化が急速に普及した。餃子は故郷の山東省から満州、今の東北地区へ、そして米を主食としている朝鮮半島を経て日本へと旅をした。この長い旅路の間に主食だった水餃子から焼き餃子に、厚い餃子の皮から薄い皮に、東北地区は気候的に豚の飼育が難しく羊肉が主流である。羊肉から再度豚肉へ、羊肉の臭いを和らげるために使用されたニンニクがそのまま残るなどに変化した。

日本では、宇都宮餃子と浜松餃子が知られている。餡の材料は双方とも豚ひき肉を使用しているが、それぞれの県の農業を反映して野菜に違いが見られるという。宇都宮は白菜が中心で特産のニ



チベット餃子作り

ラが加わる。一方、浜松はギャベツとタマネギを使用するので肉の味と野菜の甘さが感じ取れるという。

韓国、ソウルの仁寺洞（イサドッ）と中国、四川省の成都（チョンウー）で焼き餃子を食べる機会があった。日本のものと変わりなかったが、チベットで食べた「モモ」、通称チベット餃子は、皮が厚い水餃子で、ヤク肉であったが、オリジナル餃子に近い印象を受けた。

チャンナン(江南)料理、シャンハイ（上海）料理

チャンジャン（長江）流域に発達した料理である。この地域は中国の「穀倉地帯」といわれる稲作の中心地なので米飯にマッチする醤油味を中心とする煮物が多いという。また、上海が海に面しているので魚介類をふんだんに使った料理が特徴である。味は抑えぎみで、刺激ものは少ない。シャンハイガニは珍味で知られ、ワンタンも広く知られている。他にブタの角煮なども含まれる。

スーチョワン（四川）料理

スーチョワン（四川）は盆地で湿度が高く、年間の気温の差が大きく厳しい気候のため、発汗を促進し、食欲増進、強いては病気の予防のために「辣（ラー）ー 辛い（主に唐辛子）」と「麻（マー）ーしびれる（主に山椒）」の料理が発達した。有名なものにマーボー（麻婆）豆腐、タンタンメン、ホイコーロー（回鍋肉）などがある。

<本家本元の麻婆豆腐と火鍋>

チベットでの登山活動を終えて、絶景の世界遺産「九寨溝と黄龍」に足を伸ばすため四川省成都（チョンウー）に来た。ここは麻婆豆腐の発祥の地である。今から 150 年ほど前、陳さんのおかみさんが作る豆腐料理が評判であった。そのおかみさんの顔には軽いあばたがあって、陳麻婆、あばたのおばさんといわれていた。後に、陳麻婆の作る豆腐料理で陳麻婆豆腐（チェン マ ポ ドウ フウ）という名前と呼ばれるようになったとパンフレットに記されていた。

麻婆豆腐を考案した陳婆さんが始めた店は、今も現役であった。本家本元の麻婆豆腐は、山椒を挽いた黒い粉でかなり黒っぽく、油が多かった。山椒が効いており、しびれる辛さであったが、強烈な香りと圧倒的な美味しさは四川料理の極みで、日本で食べるマイルドな麻婆豆腐とは似て非なるものであった。

成都滞在中、四川料理の代表格であるフウオグウオ、火鍋を食べる機会もあった。脂、唐辛子、山椒、生姜、ニンニク、ナツメ、クコの実なども加えたスープに肉、野菜、海鮮などを入れて食べる鍋料理である。辛いのが特徴で、口の中がびりびりするほど辛い。上海から 1,490 km、羽田～那覇位内陸の成都で生イカが皿に盛られて出てきたのに驚いた。

世界で最も魚を捕り、輸入し、食べてきた日本であるが、近年、中国の魚消費量が世界の 1/3 を超えた。日本は魚輸入量の 20% 近くを中国から輸入している。このまま中国で魚消費量がうなぎ以上に増え続け輸出不可にでもなったら、日本の食卓への影響は大きい。

カントン（広東）料理

「食は広州（コウチョウ）にあり」といわれ、新鮮な海産物を使っただけのあっさりした味が特色である。フカヒレ、ツバメの巣、ヘビ料理などが知られ、他に酢豚や八宝菜も広東料理である。飲茶の習慣も広東から始まった。

<燕巣を食す>

一度は食べてみたいと思いながらもなかなか機会のなかったツバメの巣だったが、アフリカ南部

の旅の帰りに立ち寄ったマレーシアのマラッカ、華人街で食する機会に恵まれた。広東料理の高級食材として知られるツバメの巣だが、東南アジアに生息するアナツバメの唾液でできている。ツバメの巣入りお粥として食べたが、味や香りはなく、食感も特別歯ごたえがある訳でもなく滑らかな舌触りで、スーと消えてしまう寒天のような感じだった。近年、健康食品としてもて囃されていると聞いた。

<食に見る「中華思想」>

食物に関しては中華思想が厳然として存在する。中華料理は世界最高のものであって、料理に関して他国から学ぶ必要はほとんどない、と思い込んでいるようである。菓子や果物、酒は別にして、中国人は外国の料理に手を出そうとしないらしい。1つの例を挙げると、中国人通訳が、110人の中国人を連れて東京、横浜、大阪に行った。その時、ほとんどの人々は毎日ホテルの中国レストランで食事をとっていたという。日本料理の出される宴会には興味を示さず、日本料理を積極的評価したのはわずか3%に過ぎなかったという。

チリのサンチャゴから機内で隣り合わせた50才位の2人の中国人が、食事の度に匂いのきつい中国の漬物(?)を取り出して食べていた。中国人のみんながみんなとは言わないが、中国人の食べ物への執着を見る思いだった。

<「水を飲むときは、井戸を掘った人の苦勞を忘れるな」> (吃水的不忘掘井的)

日中平和友好条約の批准書交換の時、周恩来総理が引用している。鄧小平氏も平和友好条約の批准書交換で、1978年に来日した時、再三にわたって引用したことで知られている。鄧小平氏が大阪の松下電器茨木工場を見学した際、同社相談役の松下幸之助氏に中国での工場建設を要請した。これを快諾し、中国の近代化路線を決定づけたとされている。

ところが、2012年、日本政府による尖閣諸島の国有化決定を機に燃え上がった中国の反日抗議と暴動が起こった。反日の象徴となったのが山東省と江蘇省の松下電器(現パナソニック)の工場だった。暴徒が襲撃、略奪する様子を中国当局は見ているだけで制止しようともしなかった。現在の中国政府には、この諺はもはや通用しない。

【資料】文化大革命

1958年、この頃、中国では毛沢東が主導者となり第二次五カ年計画、通称大躍進と呼ばれる政策が始まる。農工業の急速な発展を目指し、数年でアメリカやイギリスを追い越してやろう!という計画である。農業では人民公社という農業共同体をつくり集団化し、工業でも生産性強化に力を入れた。しかし、十分な設備もなく農民たちに原始的な方法で鉄を量産させるなどしたため大量の粗悪品ができあがるなどして大失敗。さらには1958年から3年続けて大災害が続き農業でも大打撃を受けたことから1000万~2000万の餓死者がでる結果となった。当然、この大躍進の主導者である毛沢東も責任を感じ政治の前面から後退。次に政治の舞台に現れたのは劉少奇(リウシャウチ)と鄧小平(トウ小平)だった。彼らが行った政策は「調整政策」といって集団化の規模を縮小して余剰生産物の自由販売を認めるなどした資本主義的な政策。この政策によって中国は経済の回復を狙うのだが、この政策が気に入らない人物がひとり、毛沢東がいた。彼は、この政策を資本主義的である!として強く批判。権力を奪還する為に動き出す。その運動が文化大革命である。ちなみに資本主義っていうのは、個人が自由に生産したり商売したりできる社会。競争が生まれるので経済の発展が見込めるが貧富の差が激しくなる。一方、社会主義とは、国が決めた計画のもと生産が行われ資本は国有か公有となる。貧富の差が少なく社会的な不平等が生まれませんが競争が行われないので経済の発展が遅れる。毛沢東が建国した中華人民共和国は社会主義国家であった。だから、劉少奇や鄧小平の行った政策を資本主義への逆行だ!と非難する。この文化大革命に動員された青

年たちは社会主義を守る兵士という意味の紅衛兵(コウエイ)と呼ばれ、次第に拡大して武闘を繰り広げ文革派ですら統制不可能となった。鄧小平は農村に幽閉され、劉少奇は拷問を受け亡くなった。また、彼らを支持していた人たちも迫害の対象とされ、晒しものにされたり、殺害されたりと中国は大混乱に陥った。この文化大革命は 1976 年に毛沢東が亡くなり、毛沢東の腹心である 4 人組が逮捕されるまで続いた。毛沢東の死後は、鄧小平が政治の舞台に復活。彼は経済開放政策を強力に進める。その後の中国は市場経済を導入。国営企業を民営化し外資を積極的に導入するなど経済面では資本主義の国とっていい状態になる。貧富の差も都市と地方との格差が大きな国内問題となっている。

【資料】 一国二制度

ホンコン(香港)は、1868 年から 1997 年までイギリスの直轄植民地であり、資本主義経済体制のもとで中継貿易により発展してきた。また、工業化に成功して加工貿易が盛んになりアジア NIES の一つとなった。GDP は 10,000\$ を越えて先進国なみになり、国際金融、物流、情報の一大センターに発展したホンコンは、99 年間の租借期間が切れた 1997 年、中国へ返還にともなって、中国国内法とは別に、資本主義を 50 年間にわたって維持することを明示した基本法が適用されることになった。その結果、中国には政治は社会主義、経済は資本主義という二制度が並立することに。

【資料】 一帯一路 (One Belt, One Road)

中国国家主席習近平氏が 2013 年に提唱したアジアとヨーロッパを結ぶ二つの経済圏構想である。一帯は中国西部から中央アジアを経由してヨーロッパにつながる「シルクロード経済ベルト」、一路は、中国沿岸部から東南アジア、インド、アラビア半島の沿岸部、アフリカ東岸を結ぶ「21 世紀海上シルクロード」をさす。二つの経済圏の関係国に対しインフラ投資や融資を行い、市場の拡大と活性化などの経済効果をねらう。同時に中国が主導する経済圏を確立するという政治的目的もあると指摘されている。中国外務省、商務省などが 2015 年 3 月に発表した公式説明によれば、「一帯一路」は北線、中線、南線の計三つのルートによって構成される。通過するおもな都市と国は以下のとおりである

北線 北京—ロシア—ドイツ—北欧

中線 北京—西安—ウルムチ —アフガニスタン—カザフスタン—ハンガリー —パリ

南線 泉州(フウフウ) —福州(フフウ) —広州(コウフウ) —海口(ハイウ) —北海(ハイハイ) —ハノイ—クアラ Lumpur—ジャカルター—コロンボ—コルカタ—ナイロビー—アテネ—ベネチア